

2004年夏のフィールドワークを終えて...

刻む会 たより

No.29

2004. 12. 10

長生炭鉱の“水非常”を歴史に刻む会

事務局

宇部市常盤町一―一九(宇部緑橋教会内)

代表 山口武信

TEL 〇八三六(二二)八〇〇三

今年は、西光寺の都合が悪かったため、会場を浜中集会所に変更して行いました。

内容は、①参加者全員でお話をしながら犠牲者の位牌を並べる、②紙芝居「アボジは海の底」、③ビデオ上映、④海岸にて献花でした。

カトリック教会の方々が多数参加して下さい、熱心に質問などをして下さいました。そして、参加された方が、感想をお寄せ下さいましたので、紹介します。



参加者の感想

長生炭鉱の水没事故に想う

宇部カトリック教会 泉従公世

長生炭鉱の水没事故に関しましては、いつ聞いたか覚えていませんが、確かに耳にしたことはありました。しかし、事故の内容は全く知りませんでした。宇部カトリック教会の平和学習の一つに長生炭鉱の水没事故が取り上げられました。その中で山口先生の講演を聞き、フィールドワークでの意見交換にも参加しました。

全く泳げない私は水没事故で亡くなられた方々の苦悩は想像を絶するもので、位牌を手にした時、全身の震えを覚えました。

この方々の為にも慰霊塔の建立を切望せずにはおられませんでした。

事故を風化させず後世に伝える為に頑張っている方々に、心から感謝申し上げます。有難うございました。

長生成坑フィールドワークに参加して

平部カトリック教会 大曲 多佳子

フィールドワークの前日8/6、私は広島にいました。平和記念聖堂で行われる平和行事に参加したのです。今年には建堂50周年ということで、聖堂が建てられた経緯や、聖堂に込められた多くの人々の願いや祈りについて詳しく知ることができ、廃墟の中から復活したヒロシマと全世界の平和を希求するシンボルとして、50年前の姿そのままに聳

え立つ記念聖堂を心に焼き付けて帰ってきました。フィールドワークで見た海と、遠くに小さく見えたピーヤも忘れてはならない情景の一つになりました。祖国や家族の元に

返れぬまま海の底に沈んでいった人々の悲しみや怒りや無念の声を、私たちは聴き取るうとしなければならぬと思います。彼らの鎮魂のために。そして、戦争においては弱い立場の人々が命が粗末に扱われるのだということを心に刻むために。

「冬ソナ」現象をきっかけに、近くて遠い国と言われた韓国との心理的距離が、ウソのように縮まった感じがします。でも、この感じを日本側の一方的な思いこみと一時的な流行に終わらせず、本当の友好関係を築いていくためには、日本が韓国・朝鮮の人々に対して行ったことから目をそらしてはなりません。そして、その事実を重要なこととして伝えていくこと。その誠実さが信頼の土台となるのでしょうか。

悲惨な歴史を振り返ることは胸の痛むことです。しかし、原爆で亡くなられた人々や水没事故で亡くなった人々が現在の平和の礎であることを思い、彼らの魂が共に天の國

で私たちの平和を祈ってくれていることを信じたいと思います。

長生成坑水没の地を訪れて

カトリック教会 柳

当時の企業の雇用状況、戦前、戦中の国の政策など色々な事情があったとは言え、異国の地で、事故で亡くなった方々はどんなに無念な思いであったかと想います。

色々難しいことが有るのでしようが、単純に考えて、市民の立場から少なくとも慰霊碑だけでも建てる事が出来たらと思います。亡くなった方々、そのご家族に対して最低限しなければいけないことだと思えます。

長生成坑フィールドワークに参加して

北若山カトリック教会 由木尾延枝

浜中集会所で水非常のお話を聞き、海辺で2本のピーヤを見た。

快晴の穏やかな海は、コバルトブルーで美

しい。

あのピーヤの下の海底に、今も眠り続けるのを余儀なくされている人々の無念さを思う。世界各地で起きている争い。なぜ、罪のない弱い者が犠牲にならなければならぬのか。不条理に憤りを覚える。海の波間に献花を捧げ、世界の平和を祈った。暑い暑い一日でした。

清 敏子

今回初めて長生炭坑水非常の跡地に出かけて、当時の日本の統治政策のため、ほとんどの人が韓国から強制的に連れて来られ、採炭作業に従事、劣悪な労働環境の中で、水没事故に遭い、無惨にしなければならなかった人たちが偲びました。

一人一人の顔や姿を思い描くことはできなくても、残されている板きれのように粗末な187本のお位牌を拝見したら、実在していた一人一人の生命の証として重さを感じ

ることができました。

私が宇部市民となって十数年、宇部の歴史の中にこんなにも厳しく辛いことがあったという事実を忘れないように……。二度と再び隣国の人たちにこんなむごい思いをさせないように……。残された2本のピーヤと海水の中から引き揚げられることもなく眠らされている方々の上に神様の憐れみがいづもいづも深く豊かでありますように。

連れて行って下さった方に感謝。



二〇〇五年遺族招聘カンパのお願い

一九四二年二月三日の水没事故から六三年もの月日が経とうとしています。一瞬のうちに海の底深く沈んだ人々は、今もそこにいます。九二年に韓国より遺族を招き、追悼式を開催してから一三年が経りました。年が明けて二〇〇五年も韓国より一〇名程度の遺族をお招きして、一月二九日(土)午後一時三〇分より、第一回四回目の追悼式を行うことになりました。ご多忙とは存じますが、是非ご参集下さり、遺族と共に海底に眠る犠牲者を追悼して頂ければ幸いです。

また、一〇名程度のご遺族をお招きするた
めに、約一〇〇万円の費用が必要となります。
出費の高む折り、恐縮ではありますが、是非
カンパをお寄せ下さいますよう、よろしくお
願い申し上げます。

証言を綴る！②

中村二郎 金鳳甲（七三歳）

慶尚南道 出身

宇部市二俣瀬区車地在住

平成三年（一九九二年）頃長生炭鉱の“水非常”を歴史に刻む会の追悼式に参加されたので、車地のお宅を訪ねて聞き書きをした。

昭和一七年（一九四二年）頃は、現在の宇部市二俣瀬区車地に住んでいた。当時は、今の丸山ダム近くの山寄に住んでいた。同年八月二十七日の台風の前だったか、朝鮮人の男が二人炭鉱から逃げてきた。日本に来て一年未満だったので、彼らは日本語がまだよく解らないようだった。

朝鮮語で「腹が空った、助けてくれ」と言った。どこから来たのかと聞いても、山の方を指して、「この向こうだと言う。海があったのかと聞くと、海があったと答える。石炭を掘ったのかと問えば、石炭を掘ったと言う。とにかく腹が空ってやり切れない。炭鉱で腹が空ったと言うと殴られる。柵の中に入れられていたので、有刺鉄線を

何日も何日もかけて登って来た。海では何の音かポンポンという音がする（漁舟の焼玉エンジン音）。逃げてつかまったら殺される。何か食べさせてくれ。そう言うので食べさせると、お櫃のご飯を五、六杯食べた。二人とも二〇歳前後の年格好だった。沢庵漬をパリパリ食べた。

自分の家には当時、日本語の解らない母親と、四歳になる妹が一緒に暮らしていた。わしは今から仕事に行くが、お前たちはこの家の中に居らん方がよい。山に逃げておけ。夕方になったら予備に行くから待っておれ。出たらつかまると、そう言うて、坑木出しの仕事に出かけた。坑木出しは、松の木を伐り倒して皮をむいて、背中の「チゲ」に坑木を乗せて出す作業をしていた。

そうしたら、仕事場へ消防団の者が自転車で乗ってやって来て、「お前は逃げて来た朝鮮人を何でかばったのか」と言った。沖ノ山炭鉱は正規の手続きをしているが、この二人は強制で来ていた。国道二号線の、今の男山酒造の所の柵の手前の吉富の土堤に、トラックに乗ってつかまえに、炭鉱の男たちが、服も帽子も真黒で十人くらい

来ていた。長生炭鉱から来たのだ。

「何でかばったのか」と言うので、「腹が空ったというから」飯を食べさせただけだ。飯だけは食べさせる」と言ったら、「お前は小僧のくせに何を横着言うか」と棧のステッキの柄の曲がったところを首にひっかけてひっぱり上げようとするし、十人が手錠をかけると言うので、そこにあつたシヤベルを掴んで向かっていった。そしたら、吉富の親父が、「中村、お前何しようるか！」と言うので、向かって行くのを止めた。吉富の親父は大きな男だった。

この長生炭鉱から逃げて来た男たちは、「山に逃げておけ」と言ったのに疲れていたようで、山に行かんで、そのまま布団の中で二時頃まで寝ていたという。家では、わしの母親は日本語が解らんし、妹は四歳でどうしようもできんで、二人は連れて行かれたという。後で石炭局に文句を言うたが、頼尊はワンマンで、全国の会長だと言つて取りあつて貰えなかつた。